

「消滅可能性都市」のふるさとを守るには

萩原南中学校 三年 木下 愛智

私の住んでいる地域には日本三名泉のひとつ、自然豊かな「下呂温泉」がある。そこでは、飛騨牛や郷土料理ケイちゃんなどの美味しい食事が楽しめる。そしてそれらの魅力にひかれて、全国から多くの方が来訪する。しかし、そんな下呂市は全域が消滅可能性都市に指定されている。消滅可能性都市とは、二千五十年までに若年女性人口が半数以下になり、最終的には消滅する可能性があるということだ。下呂市は人口の減少、少子高齢化の進行が長く続いている過疎地域なのだ。

「広報げろ」に書かれている市内の児童生徒数が年々減少しているのを見るとなんだか切ない。八年前には馬瀬中学校が閉校して、私たちの中学校と統合した。馬瀬地域の仲間と共に学べて嬉しいが、少子化を身近に感じた。将来、自分が生まれ育った愛着のあるふるさとが消滅してしまうかもしれないと考えたら胸が張り裂けそうになった。

医療面では脳神経外科の常勤の専門医が四年前にいなくなり、緊急の時はおよそ五十キロ離れた高山市の病院に搬送する必要がある。以前と比べ、市外への緊急搬送が二倍以上に増えたそう。私の祖父も目が悪く、もし手術になればドクターヘリで緊急搬送になると、医師から伝えられたことがある。大切な家族の治療が手遅れになってしまうかもしれない。その時、医師の不足は命に関わることだと痛感した。

自分にもできることはないかと新聞を見ると、地域医療を支える医師を確保するための地域枠選抜という入試制度があることを知った。さらに、その制度を使って岐阜大学医学部に合格された方が地元にいると知った。地元の先輩のがんばっている姿に、夢だけにとどまらず努力すれば何事も実現できると自信がもてた。また、将来のふるさとを守っていくためには、私たち一人一人がふるさとのために働くことが重要になってくると感じた。

中学三年生である私は今、ちょうど自分の将来の進路を考える大切な時期だ。これから様々な職業について調べながら、自分自身のよさや興味・関心があることを見つめ直す機会があるだろう。そんな時、ふるさとを元気にするために自分ができるとは何かを考えていきたいと思った。私でも自分の得意分野やスキルを活かせれば、ふるさとに地域貢献できるはずだ。故郷への恩返しの気持ちを忘れずに進路を選択していきたいと強く思った。

私は中学二年生の時、地元の職業体験で地域の魅力を伝えるガイドのお仕事をされている萩原観光協会の都竹さんと出会った。都竹さんは地元の知り合いとのコミュニケーションを大切にされていて、地元の皆さんから信頼されていることが伝わってきた。だから心に響く魅力的なガイドで観光客の興味を引き込み、感動を与えて虜にさせることができると分かった。萩原には、新鮮な地元食材を使ったこだわりのグルメで、この地域の食文化や伝統を深く感じて喜んで欲しいと、地元で愛着をもって働く人たちがいる。都竹さんは、萩原の案内をする時に、この思いを観光客に伝える橋渡し役を担っている。都竹さんは、地域発展に貢献する、なくてはならない存在だと思った。そして、私は、地元を愛し、生き生きと働く姿に、慣れ親しんだ故郷に貢献をする事の素晴らしさを感じた。私の父は歯科医師をしている。そして、父の思いを受け継いで、私も歯科医師として地元のために働きたいと考えている。自分が働ける限りこの地域の方々の健康を守りたい。また、今からでもすぐに始められる地域のボランティア活動にも積極的に参加して地域貢献すると決心した。

下呂市では、市内に大学がないので進学や就職を機に多くの若者が市外へ転出しているのが現状である。これは、「私たち一人一人の郷土愛」で打開できはしない。そして、ふるさとを「消滅可能性都市」から救える一番の手段だと私は考える。この地域で育った大切な仲間たちがより多くふるさとの未来を担う一員となっていることを私は心から願う。

私の両親は、共に関西からこの地へ来た移住者だ。だから、私は地元の仲間や先生や地域の皆さんのおかげでここまで育ってこれたと思う。実際、分からない事を仲間や先生にとっても親切に教えてもらって助かったことが数えきれない程たくさんある。地域の人は気楽に話しかけてくれて、私のことを自分の家族のように迎えてくれた。本当に本当に感謝している。この地域をふるさとにできてよかったと、私は心の底から思う。私は「消滅可能性都市」のふるさとを守るために、地元で働いて必ず恩返しすると心に誓った。